

山と博物館

第18巻 第10号 1973年10月25日 大町山岳博物館



箱ガ岳仲秋

撮影 斉藤忠彦

いま町づくりを

昨年しばらくヨーロッパに滞在した。各地を転々と歩きながら、その町づくりの素晴らしさに驚嘆した。それは特定の大都市がそうだというのではなく、まるで名前を知らない小さな町へ行っても共通であった。

どこを歩いても、人間がゆつくり物考えながら歩ける歩道があり、緑深い木だちにおおわれた公園があり、道々の木陰には気軽に腰かけられるベンチがあり、窓辺には奇麗に咲いた鉢植の花があり、われこそはと顔を出す看板も、拡声器から流れる流行歌の絶叫も無縁であり、形と色彩と材料を統一し、しっかりと落ちついた家並がある。

そこには、美しさと静けさとみごとな調和とがある。そして、何よりも人間を尊重する心がある。

これらの町を歩く時、人間にとって町とは何かをしみじみと味わう。文明のわざとは何かをしみじみと感じる。町をつくり、ここに住んだ人々の願いや思いが、町じゅうにこめられている。これがまさに歴史の重み、文化の積み重ねというものである。人々はこの町に住むことによつて、そんな祖先の遺産を、ごく自然に身につけていくのであろう。

近年大町周辺でも、自然破壊が叫ばれて久しい。しかし、すべて人間の営みであることを思う時、問題の深さを思わずにはいられない。それは、あらゆる色彩と音が氾濫し、われこそはと大きな顔を出す看板やネオンの町が、そのまま場所をかえ野に山に広がったに過ぎない。

そうであるとするならば、国を選ぶほどの自由を持ちあわせない我々にとつて、この町を、美しさと静けさと人間を尊重する町につくりかえていく以外に、できることはない。おそろしく時間のかかることもかもしれない。しかし、今だからこそ、それをはじめなくてはならないと思うのである。

(大町の自然を守る会々員 小林 明)

森のコウモリーカグヤコウモリについて

吉行 瑞子

私は今年の九月なかば、長野県伊那市西春近で採集されたカグヤコウモリを入手して調べる機会を得ることができた。これは信州大学医学部第二解剖学教室の宮尾嶽雄博士のご好意によるものだった。伊那市からカグヤコウモリが採集されたのは初めてで、長野県下ではこれまで、東筑摩郡山形村、浅間山麓、木曾谷から記録があるのみである。

日本ではこの他に北海道の札幌、女満別、根室、置戸、青森県、岩手県、山梨県の精進口登山道に生息している。日本以外では中国の福建省、ウスリー地方に分布し、比較的分布の狭い種である。

カグヤコウモリの発見史

カグヤコウモリの名は学名、和名ともに国立科学博物館動物研究部長今泉吉典博士によって命名されたものである。平安時代のかの有名な物語の一つである竹取物語の中で、竹取の翁は、ねもとがひかり輝く一本の竹の中に美しい姫を発見し、この姫にかくや姫と名づけて育てたという話がある。カグヤコウモリが発見されたのはネマガリダケの群落の中だったので、竹取物語よりヒントを得て、この名がつけられたのである。物語の竹取の翁が感激したと同様に当時、今泉博士には初めて日本で発見された種類として印象深かったことだろう。

こうして名づけられたカグヤコウモリは本州のさいはての地、十和田湖の西方に位置する青森県南津軽郡竹館村葛川の原生林で発見された。東北の秋が深まり行く十月三日、現在、青森県平賀中学校教諭阿部昭二氏は昆虫採集のため、ひとかかえり以上もある灰白色と

白っぽい色をばかしたような、しぶい色の樹のはだのブナの巨木が生える原生林を歩いてきた。ここでは下生層に人の背丈の二倍以上もあるネマガリダケが繁茂していた。するとネマガリダケの中から、やや活動のにぶい黒っぽいコウモリが飛び上がった。驚いてすぐにご持参の捕虫網で捕えた。光沢のある美しいゼフィルスを求め、青森県の動物を長年観察されている阿部氏はその時、洞窟によくぶら下がっている黒っぽい後足の大きなモモジロコウモリでないこととすくすく解つた。初めてみるコウモリというわけで、アルコール漬にして国立科学博物館におくられた。捕虫網で捕えた時は夏の夜空を目にもとまらぬ速さで飛びかうコウモリと違って活動がにぶかったという。おそらく冬眠状態にはいるとうとしていたのであろう。この個体がカグヤコウモリのタイプ標本となったが、前腕長はわずか三六・五ミリ(本州産の一〇個体の前腕長の九〇%信頼限界は三六・四一・二ミリ)、中手骨と第一指骨は未だ十分に化骨せず、毛色も暗色である。おそらく、その年生まれて、生後三カ月ほどのものと推定される。

青森県での二個体目は同じ部落だが、浅瀬川の上流で、二つの支流に囲まれたブナ林の林縁にある石切場の岩の下方にひそんでいたもので、十二月三日の採集で冬眠中のものであった。この個体も並成獣で、この年生まれのもので推定された。この二個体はともに雌でカグヤコウモリの越冬する環境を知る上にきわめて有効な記録である。

富士の大原生林でのカグヤコウモリ

私はこれまで、本州のいろいろな地域の翼

手類の生息状況を調べたが、富士の大原生林はコウモリの宝庫といつても過言ではあるまい。志賀山のおたの申す平の植生はコメツガ、オオシラビソ、ダケカンバなどの高木混交樹林帯で、富士の精進口登山道の二〜三合目の植生によく似ている。しかし、おたの申す平では我々がIBPの調査を行なった一九六七年〜一九七一年の間に一回ウサギコウモリが捕獲されたのみで、ついに飛ばしようしている姿をみる事ができなかった。富士の大原生林の方が、おたの申す平のそれよりも広葉樹の老木が多いためだろうか。

一年の間、もつともコウモリが活動する六月から九月の間で、カグヤコウモリは六、七、八月に採集された。この地域の優占種、シナノホオヒゲコウモリより個体数はぐんと少ない。調査した頭数の四五パーセントをシナノホオヒゲコウモリが占めるのに対し、カグヤコウモリはわずか六パーセントにすぎない。そして、またおもしろいことに、シナノホオヒゲコウモリは六〜九月の毎月採集され、雌雄の割合はほぼ同じである。七月中旬には出産前の胎児をもつ妊娠個体が見られ、八月中旬には出産後の個体が活動している。シナノホオヒゲコウモリは富士の大原生林中で分婏、哺育を行なう。このように大原生林で繁殖し、ここの常住者と思われる。しかし、ここで冬眠している事実をまだ把握していないので問題は残されている。また、富士山の周辺一帯には数多くの熔岩洞があり、初冬、



カグヤコウモリの耳

早春におけるこれらの調査が行なわれたが、熔岩洞から全く発見されていない。したがって、熔岩洞で冬眠しているとは思われない。ところが、カグヤコウモリは富士山では、雄の個体が非常に多く、今年の夏もついに雌の個体を見ることができなかつた。反対に、北海道における同じ時期の採集記録(服部一九七一)では一〇例のうち、雌七頭、雄三頭である。筆者が調べた北海道産のもので四頭のうち三頭が雌で、一頭の雄は生後間もないものだった。北海道衛生研究所の服部睦博士は本種が女満別町西女満別の木造住宅で分婉、哺育していることを観察している。カグヤコウモリの分婉、哺育は富士の原生林ではみられないので、おそらく北海道やその他の地域で行なわれるのではないだろうか。また、カグヤコウモリはこの時期にはかなり広い地域にわたって雌雄の群が別になると思われる。このような翼手類の主な繁殖地繁殖の状況などは個体群分類を行なうのにきわめて重要な資料となるので、我々は見のがしてはならない。

カグヤコウモリの分類

カグヤコウモリは翼手類の中で、おもに虫を食べる小翼手亜目のヒナコウモリ科のホオヒゲコウモリ属のコウモリである。ホオヒゲコウモリ属は極地をのぞいて広く世界に分布し、翼手類中もつとも分布域の広いグループである。日本では翼手類全種の三〇パーセントを占め、九種が数えられる。これらの種類は洞窟にすむモモジロコウモリをのぞいて、いずれも個体数は少ない。

日本にすむホオヒゲコウモリ属は大きく次の四つのグループに分けられる。オレンジ色と黒

色のツートン・カラーの華麗なる対馬産のクオアカコウモリが属するクリソプテロン亜属後足や爪が大きなモモジロコウモリを含むレウコノエ亜属、後足が小さく、左右の後足の間の腿間膜の縁に細い毛のれんをさげたように生えているノレンコウモリを含むイソツス亜属、富士の大原生林の優占種シナノホオヒゲコウモリを含む、比較的后足が短かいグループのセリシウス亜属に分けられる。カグヤコウモリは後者に属している。この中には尾瀬で初めて採集され、まだ一頭しか採集されていないオセホオヒゲコウモリ、これに似たホオヒゲコウモリ、これよりやや小さいヒメホオヒゲコウモリなどが含まれる。カグヤコウモリはこれらに比較して、後あし、つまり脛骨長が一八ミリ内外で著しく長く、尾も

長く、四三ミリ内外で、頭胴長よりわずかに短かいだけである。前腕長は三九ミリ内外で大きい。尾長と脛骨が長いので、腿間膜面の面積が広い。体色は成獣では暗褐色で、シナノホオヒゲコウモリやヒメホオヒゲコウモリの背面上に見られる赤橙色の光沢毛がほとんど見られず、正中線上、体側面も一様な色である。頭骨では吻部が短かく、脳が入っている脳蓋部が著しく高い。セリシウス亜属の中ではおそらくより進化したタイプだと思ふ。カグヤコウモリは、これまで森林での採集例が多いが、洞窟、人家内などの環境でも採集され、ハビタットが変化に富んでいる。カグヤコウモリは形態的に進化しているのみならず適応力の大きいこともしのばれる。



富士精進口登山道二合目 カグヤコウモリの生息地

減少する森林のコウモリに保護の手を、これまでの私のまだまだ不十分な調査ではあるが、シナノホオヒゲコウモリなど森林棲のコウモリがすみうる環境は非常にかぎられているのではないかとされる。樹木の小さな二次林やスギやヒノキなどの植林地にはほとんどいない。森林にすむコウモリには大きな樹洞がある老木が必要らしい。しかし、ときには原生林の中に小さな小屋があれば、その小屋を利用していてもある。例えばウサギコウモリなどはしばしば無人の営林署の小屋にすんでいることがある。小屋の中に彼等の大好物の蛾の翅が散乱していることがある。獲物を腿間膜に入れて小屋の中で食べることがある。

今日では我が国の北から南までブナ、アオモリトドマツなどの大木の伐採がすすめられている。ブナの原生林はだんだん少なくなつて、針葉樹に変わりつつある。また観光道路建設、都市化などの影響もうけて森のコウモリは危機にさらされている。

なお、コウモリはモグラやネズミなどと違って、多くの種がわずかに一頭しか生まない。そして、繁殖期に何回も出産する多産のネズミと違って、年一回しか出産しない。すむべき環境が破壊されれば生息数は減るばかりである。

鳥類では古くから行なわれている巣箱の利用をコウモリにもこころみる必要がある。外国ではすでに利用されているが、どの程度効果があるか明らかでないが、日本でも実施する必要がある。

古い老木をコウモリにとっては残してほしいが、人間生活にとつては必ずしも条件が一致しないことがある。その場合、経済的、景観的に許されるならば、小さな小さなコウモリ的小屋をたてたい。私の夢物語に終るであらうか。(国立科学博物館動物研究部)

ネズミの話

(一)

家ネズミ

金森正臣

ネズミは古くから人間と関係が深かったらしく、語り伝えの中によく顔を出す。

古くは十二支という歳の十二獣のうちの子(ネ・ネズミ)が入っている。白いネズミを大黒様の使いとして、大黒ネズミと呼び、家に居ると、その家は繁栄すると言われていた。また、火事の時には、ネズミが逃げだすので、ネズミの居る家は安心だなどと言う俗説もある。江戸時代の草紙にネズミの嫁入りの話があるし、両国橋の近くで、ネズミのつけ焼を売ったことが記録されている。さらに、ネズミの肉を民間医薬として使ったことも記されている。

いずれもかなり身近の動物であったこと、親近感を持たれていたことを示している。決して現在のようにきらわれていなかったようである。しかし、現在のネズミは、食糧の被害、病気、農林漁業への害の急激な増加などとても親しみを帯びて語れる状態ではない。古くから一般に知られているこれらのネズミは、いずれも家ネズミでドブネズミとクマネズミである。代表的な家ネズミで、体も大きく尾も長い。

ドブネズミは体長(尾を入れない長さ)が二五センチメートルにもなり、体重四〇〇グラムにもなる大きなものもある。尾の長さは体長よりも少し短い。耳の長さは短く(写真一)、前方へ折れたたんでも目に達しないので、クマネズミと区別できる。毛の色は変異が多く、代表的な褐色の混じったネズミ色のもの、黒味の強いもの、白色のもの、部分的に白いものなどさまざまである。白色のものは医学などに、実験用ラット(ダイコクネズミ)として使われている。生活の場所は下水の近く

や勝手など、水に関係したところが多いが、天井裏などにも登るし、屋外にも生活できる。

クマネズミはドブネズミより少し小型で、体長二〇センチメートル前後、尾は体長より少し長い。耳は大きく、前方に折れたたむと目を被う。毛の色は茶色の混じったネズミ色で腹面はパフ色。生活場所は主に天井裏やふとん室など、家の中の乾燥した場所が中心である。

この他に家の中に入って生活するネズミにハツカネズミがいる、小型で、体長一〇センチメートル前後で尾は体長よりわずかに短い。毛の色は変化が多いが、黒褐色、腹面は白色が多い。

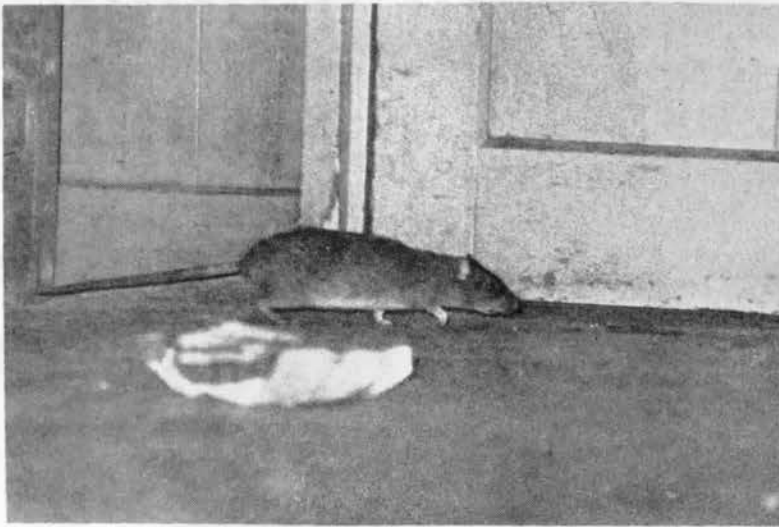
ドブネズミ、クマネズミは雑食性で、特に高栄養のものを好む。従ってその食糧のほとんどをすべて人間に頼っている。

両種とも古くから日本にいた種であるが、最近ドブネズミが外来のドブネズミと交雑し、体も大きく、強くなり、次第に勢力を増して、ドブネズミの勢力範囲が増大しつつあるようである。この新しいドブネズミは攻撃性が強く、勇猛果敢で、人間との接触も非常に大胆になって来ている。昔はネズミと言えば、夜行性で、昼間や人間の物音のする時間にはあまり姿を見かけられることはなかった。最近では列車内や道路の側溝、食堂などで昼間から見かける。このような性質の変化や、交通機関の発達

荷作りの大型化などは、ネズミが入って移動するには都合である。広範囲に渡るネズミの交流は以前にはあまり考えられなかったことであり、勢力の強い種が広がるには好条件と言える。

しかし、最近のドブネズミの異常増大の最大の原因は、日本人の食生活の変化と一番関係が深いであろう。いかに好条件、好環境があっても、大食、高栄養を要するドブネズミは、食糧が十分でないとは増加できない。

第二次大戦直後の食糧事情の悪い時には、残飯も少なく、高栄養な部分はほとんど捨てられなかった。このような時期には、クマネズミや以前のドブネズミには良くても、現在ドブネズミには必ずしも良くはない。最



ドブネズミ、走る時には尾をピンと張っている。耳が小さい。

近の食糧事情は大きく変わり、捨てられる残飯も多く、高栄養のものも含まれている。代表的なのが、東京都の埋立地、夢の島である。毎日混入して来る多量の残飯でドブネズミとハエが大群を成し大いに苦勞した。結局、食糧を断つ以外良策はなかったようである。

最近数年、県内東北部と松本平で、ワイル氏病が発生している。県内ではあまり知られておらず、佐久の総合病院で発見されて以来、毎年患者が出ています。ドブネズミの腎臓内に細菌があり、尿の中に排出される。乾燥に弱い水に入ると強く、人間の手などが触れるとわずかな傷からも感染する。腎臓と肝臓がやられ、死亡率が高い。死亡すると菌も死にワイル氏病の診断もつかないまま、他の病名で死んだことになる可能性もある。特に最近のように、広い範囲のネズミの交流が多くなって来ていることは、これらの病気が短期間に広範囲に広がる可能性が強い。この他にも食中毒など多くの病菌を媒介することは良く知られている。

以前、高名な学者がネズミ算のごとく増加するネズミの繁殖力と、戦後ようやく良くなってきた食糧事情のもとで急激に増加し始めたネズミに注目し、人間の次にはネズミの世界になると発言し、現在でもこの説をしばしば耳にする。

しかし、ネズミは食糧、生活の場、巣を作る場所がなくては増加できない。一人一人が食糧を大切にすることによって、人間はネズミの害をもっと小さくすることができる。

(東京教育大学理学部
菅平高原生物実験所助手)

山と博物館 第18巻 第10号
一九七三年 十月二十五日発行

発行所 長野県大町市TEL②〇二一
大町山岳博物館

印刷所 大町市下仲町
大糸タイムス印刷部

定価 年額 四〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野一三、二九三)